

「耐震課外授業」の効果について —アンケート調査に基づく分析—

静岡産業大学 経営学部
助教授 牧野好洋

概要

伊藤貴広氏が実施する「耐震課外授業」においては、受講した児童が抱いた感想を統計的に把握し、今後の防災教育の推進・向上に活用するため、授業後に児童を対象としたアンケート調査を実施している。

本稿は2006年10月、11月に大井川南小学校、大井川東小学校、大井川西小学校で実施した耐震課外授業に関し行ったアンケート調査を集計し、結果を考察するものである。

調査は授業後に調査票を児童に配布、回答を記入してもらい、回収することによった。分析は単純集計と後にクロス表に示すクロス集計を用いた。重要な項目については、属性（男女、学年、住居形態）ごとに回答に差があるか否かを、「比率の差に関する検定」により調べた。分析は第一に三校の調査結果を統合し行い、第二に小学校ごとに行った。

前者より得た結論は、主に以下の通りである。

地震の被害に関する家庭での会話

- ・「過去に地震の被害について家庭で話をしたか否か」について尋ねたところ、回答者の43.3%が「話した」と答えた。女兒の方が男児より、また5年生の方が4年生より、そのように答えた比率は高かったが、属性間に統計的に有意な差は見られなかった。¹
- ・耐震課外授業を受け、「今後、地震の被害について家庭で話をしたいか否か」について尋ねたところ、回答者の58.4%が「話したい」と答えた。女兒の方が男児より、また4年生の方が5年生より、そのように答えた比率が高く、今後話をしたいか否かについては、男女間、学年間に統計的に有意な差が見られた。
- ・過去に「話した」と回答した者の割合43.3%と今後「話したい」と回答した者の割合58.4%の間には統計的に有意な差が見られ、耐震課外授業により、回答者が今後、地震の被害について家庭で話をしたいと考えたことが示唆された。

¹ 「話した」とした回答者の割合には男女差（男児43.0%、女兒43.5%）、学年差（4年生37.8%、5年生46.3%）が見られる。この差が統計的に有意かどうかを、有意水準5%とした比率の差に関する検定（両側検定）で分析した。本稿では以下、同様の方法で比率の差に関する検定を行っている。

興味を持った項目

- ・「興味を持った項目」について尋ねたところ、「スジカイの体験（家を強くする話）」が50.6%と最も回答の割合が高く、次が「地震の話（クイズ）」17.3%であった。前者の割合が高いことは、建築士が自分の得意分野とする模型を用いて耐震補強の重要性を訴えるというこの授業の特徴を示している。
- ・「興味を持った項目」を学年別に考察すると、「スジカイの体験（家を強くする話）」は4年生30.5%、5年生61.7%と5年生が高く、その差は統計的に有意であった。「地震の話（クイズ）」はそれぞれ25.6%、12.8%と4年生が高く、同様にその差は統計的に有意であった。ここから、学年によって興味を持つ項目が異なることが示唆された。

この授業の評価

- ・「この授業に対する総合的な評価」を尋ねたところ、回答者の78.4%が「おもしろい」と答えた。男児の方が女児より、4年生の方が5年生より、そのように答えた比率は高かったが、その差は統計的に有意でなかった。

その他

- ・以上の三つのテーマ（地震の被害に関する家庭での会話、興味を持った項目、この授業の評価）それぞれについて、住居形態（一軒家、その他）による回答傾向の違いを考察したが、その差は統計的に有意でなかった。すなわち住居形態によって、児童が抱く感想の違いが生じることはなかった。このことは、今回の耐震課外授業が都市のような集合住宅が多い地域、地方のような一軒家が多い地域、いずれにもおいても適用可能であることを意味する。²

以下、第Ⅰ章ではこのアンケート調査の設計について整理する。第Ⅱ章では三校の調査結果を統合し、結果を考察する。第Ⅲ章～第Ⅴ章では小学校ごとの分析を行う。

² これは現時点の標本の大きさ（ $n=231$ ）において得られた結論である。もちろん、今後、標本の大きさが大きくなるにつれ、住居形態間の回答傾向に統計的に有意な差が生ずる可能性もある。